

入賞

きれいな海岸と自然に還る プラスチックで創る、これからの福島

福島県いわき市立中央台北中学校

わたなべ あやた
渡邊 絢太

私の住むいわき市は福島県の浜通りに位置し海に面している。いわき市はヒラメやアンコウ、めひかりなどの常磐ものが取れる漁場として広く知られている。私も常磐ものの魚は大好きだ。また、環境をテーマにした海洋水族館アクアマリンふくしまでは海の素晴らしさを広く学ぶことができる。幼少期に訪れた時の記憶では海にすむ生き物のことだけではなく海のごみ問題についてのブースがあった。その時はあまり関心が無かったが、小学4年生の学習で、SDGsについて学ぶ機会があり、17の目標の中に「14海の豊かさを守ろう」があることを知り、そこから私は海の問題やごみの問題に興味を持った。

8月に、毎年恒例の行事であるいわき花火大会が小名浜港で開催されている。来場者数は約6万人にのぼり私も毎年楽しみにしている。そこには多くの出店も並ぶ。ごみを分別して捨てる場所もあるのだが、今年の花火大会の翌日もう一度海辺を訪れて海を見たとき、私は息をのんだ。海辺に食べ物のプラスチック容器が散乱していたのだ。その時SDGsの14番を学んだときのことを思い出した。人が使ったプラスチックごみが年間900万～1400万トン海に流れていることを。そして、プラスチックは自然界で分解されず海を漂い続けることを。常磐ものの魚たちは一体どうなってしまうのだろうか。ただでさえ、福島第一原子力発電所からの処理水の問題で、福島県産の水産物への風評被害があるという。そこにこのプラスチックごみだ。海岸を見た

人たちは、常磐ものへの印象を一層悪くしてしまうだろう。

そこで私は考えた。まず、いわき市の海岸をとことんきれいにするのだ。いわき市でも海岸沿いの小中学校では、定期的に海岸清掃をしていると聞いたことがあるが、この取り組みをいわき市内全小中学校に広げ、海岸でプラスチックごみを拾う活動を「当たり前のこと」として浸透させる。そのことで、いわき市で生まれ育った全ての人が、海岸をきれいに保つという意識を持つことができる。

次に、いわき市内で、自然に還るプラスチック素材の開発を進め、広く世界に発信する。すでにスーパーマーケットやコンビニのレジ袋など、自然界で分解されるプラスチックは生み出され普及しているが、限定的なのが現状だ。インターネットで調べたところ「強度が低くいずれ分解されるため長期間使うような製品には向かない」とのことで、広く普及していない。そこでこの問題を解決し、広く使われるようにしたい。ちょうどいわき市には化学に関する高専の学科や大きな企業がある。私も将来、素材の研究や製造などを学び、夢のプラスチックを作るプロジェクトを立ち上げ、世界に発信したい。

「海岸のきれいないわき」「自然に還るプラスチック素材の先進地いわき」。この活動を通し、常磐ものへの風評を完全に無くし、常磐もののおいしさをより多くの人に伝えることで、いわき、そして福島のこれからの環境向上に貢献したい。